

「秋石」とは何か？

——付：各種結石症の治療について——

中醫クリニック・コタカ

小高修司

1, 秋石に二種有り

中唐の詩人として有名な白居易（楽天）に次の詩がある。

『白氏長慶集』巻36(3526) 戒薬（68歳作）

促促急景中 蠹蠹微塵裏 生涯有限限 愛戀無終已 早夭羨中年 中年羨暮齒
暮齒又貪生 服食求不死 朝吞太陽精 夕吸秋石髓 徼福反成災 藥誤者多矣
以之資嗜慾 又望延甲子 天人陰陽間 亦恐無此理 域中有真道 所說不如此
後身始身存 吾聞諸老氏

（あくせくと歲月過ごし うごめけり俗塵世界 生涯は限り有るに 愛恋はやむ時も無し
夭折は中年の願ひ 中年は老いを羨む 老年も生に執着 服食し不死をば求む 朝に太陽の精を呑み 夕に秋石髓を吸う 福を求め反って災い 薬には誤り多し 薬飲みて嗜欲を充たし また延寿を望む 冥冥の天の定めに 恐らくはこの理あるなし この世界真の道有り 説くところ此に異なり 身を忘るそこに身の有り それこそが老子の教え）⁽¹⁾

唐代は体内の気を巡らす「内丹法」が未発達であり、重金属類を服用する「外丹法」が一般的であり、盛唐の杜甫などは丹薬を服用し寿命を縮めたことが詩作より想像できる。白居易は実際には丹薬の服用はなかった（或いは極少し）と思われ、天命を全うしている。

道教の經典として最初期に属する『周易参同契』（後漢、魏伯陽撰）には以下のように記されている。「眞鉛と眞丹砂の二物を混ぜ錬成すると、黄牙を生じる。これを淮南王は錬秋石、黄帝は美金華（又は美鑠）と呼んだ」（巻66 金丹論第三）。

このように道教関連で「秋石」とは鉛と水銀の精錬物であることが分かる。だが『道教大辞典』（華夏出版社、1994）では、この黄牙（黄芽）以外にも①金の隠名②礬石粉があげられている。黄芽と考えれば重金属であるから、当然重篤な副作用が考えられる。そこで例として『醫説』（張杲、1189）の「金石薬之戒」を見ると、その中に「秋石不可久服」として「秋石を久しく服すれば渴疾を成す。盖し鹹は能く血に走る。血に走れば人を令て渴させ水を制すること能わず妄行す。」とある。

えっ、味が鹹（塩辛い）??。これで改めて本草書を調べたところ、道教・外丹の考えとの混淆が有るらしく、初期の本草書では類似の薬効を挙げながら、起源が全く異なるものとされ、その薬物が現在に至っていることに気づいた。

秋石の記述は『証類本草』（1100年頃、唐慎微）が初出とされているが、単項目としての記述はなく、巻15人部に「秋石還元丹：大補、暖。（顔）色を悦くし、食を進め、下を益す。久服すれば百疾を去り、骨髓を強くし、精血を補い、心を開き志を益す」とある。更に付記があり、男子の小便（童便）を煮詰めた散薬を丸として服用することが記されている。以後時代が下がるにつれその製法も整えられ、『本草蒙荃』（陳嘉謨、1565）には「毎月、童便を取り、石膏七錢を加え、桑の枝で攪拌し、上澄みを取る。…こうすることで淨らかで鹹味も減り、重ねた紙の上で乾かし、表面の綺麗なところを取れば秋石と為る。」

とある。効能は「腎水を滋し、還元を本に返し、丹田を養い、根に帰し命を復す」と、道教外丹薬としての鉛+水銀に考えられた効能（「不死」は無いが）に近似している。

更に単味ではなく製剤の1成分としての用法も多く見られ、例えば古い用例として『三因極一病証方論』（宋、陳言、1174）の「鹿角霜丸」は「多く憂思、失意、志舎不寧に因る膏淋を治す」として「鹿角霜+茯苓+秋石」の組み合わせである。

現代中薬学の教科書では、秋石の効能として「滋陰降火、止血消瘀」、主治として「虚勞羸瘦、骨蒸癆熱、咳嗽、咽喉腫痛、遺精、頻尿、帯下」などが挙げられており、道教的用法とは離れてきている。一時流行した「飲尿療法」のように「人尿」は生薬辞典に記載があるが、人尿の自然沈降物から得られる薬物として「人中白」は、既に『名醫別録』に「溺白涎」として「鼻衄、湯火灼瘡を療す」と記載されている。現代本草での効能は「清熱降火、止血化瘀」である。

次に同じ小便由来の「困ったさん」として尿路系結石について考えてみよう。

2, 泌尿器結石の治療

症例 W.H. 50歳 男 公務員 170cm 62Kg 再初診'09-3-21

主訴：左少腹痛、血尿

現病歴：1992年5月に左少腹痛、血尿が有り、尿管結石の診断の下、内視鏡的に排石を行う。二年ほど前からあった腰痛は、当時牽引などでも効果なかったが、排石後は軽快した。だが腰酸重、倦怠感は取れなかった。1993年2月に某院で煎薬治療を受けたが多少軽快のみであった。4月に当院受診し加療、状態の改善を見ていた。その初診時の所見・処方は以下の通り。

脈診	寸脈	関脈	尺脈
左	滑	滑	沈滑細
右	滑	沈滑	沈滑

舌診：やや紅暗、裂紋有り、舌苔中根黄色、前少。舌裏の静脈の怒張有り

辨証：湿熱血瘀

処方：金錢草 9g、海金沙 9g、胡黄連 9g、蒲公英 15g、綿茵陳 12g、桑寄生 15g、当帰 9g、川牛膝 9g、木香 6g（後下） 3x15T

第二診：非常に調子よい。

脈診	寸脈	関脈	尺脈
左	沈	沈滑	沈
右	沈滑	滑	沈

舌診：暗、舌苔薄い黄潤。舌裏の静脈の怒張有り

処方：金錢草 15g、海金沙 9g、蒲公英 15g、綿茵陳 15g、桑寄生 15g、当帰 12g、川牛膝 9g、木香 6g（後下） 3x14T

【処方解説】金錢草の薬量が少なめであるが、他の清熱利湿薬を用いている。

その後、発作がないままに経過していたが、2008年3月30日朝に多量の血尿があり、翌日朝も少量の血尿持続し、右の少腹痛があった。某病院のX-Pで石は見あたらず、膀胱鏡、腹部エコーも異常は見つからなかった。ただ顕微鏡的血尿は持続。

その時の当院での現症・処方は以下の通りである。

脈診	寸脈	関脈	尺脈
左	滑細	滑	沈滑細、長
右	滑細	滑細	滑細、長

舌診：やや暗、舌苔白、根剥。舌裏の静脈の怒張有り

処方：(1)人参 9g、葛根 15g、干地黄 15g、女貞子 15g、旱蓮草 9g、炮附子 6g、竜葵 30g、石葦 30g、猪苓 9g、滑石 18g、竜骨 30g、炒甘草 3g 3x14T

(2)雲南白朮 2g 2x14T

【処方解説】ここでは理由は不明だが、三金湯の代わりに泌尿器系のガンに頻用する竜葵・石葦などの清熱利湿薬と共に、六一散（滑石 6：甘草 1）も配合している。舌根の剥苔は腎陰虚と考えられるので、干地黄と共に二至丸（女貞子＋旱蓮草）を用いている。清熱薬や補腎陰薬の多用による裏寒状態の悪化を防止する目的で炮附子も併用している。

今回再び 2009 年 3 月 20 日に左少腹痛、血尿が発症した。尿管結石の再発と自己判断した患者は翌日当院受診。

現症：

脈診	寸脈	関脈	尺脈
左	滑細	滑細	沈細
右	滑細	滑	沈細滑

舌診：やや暗胖、舌苔白薄膩、花剥。舌裏の静脈の怒張有り

治法：清熱利尿、温裏碎石、安神

処方：牡蛎 20g、磁石 20g、炒酸棗仁 24g、茯神 15g、炮附子 3g、烏頭 3g、金錢草 30g、海金沙 15g、鷄内金 6g、葶藶 9g、石葦 15g、玄參 15g、干地黄 15g、炒甘草 6g 3x14T

【処方解説】近年は多くの慢性疾患患者は背景に不安感を抱くことが多いと見なし、また裏に寒邪を持つことが種々の病態発現に大きく関わると考えるようになった。そこで中医火神派の大家であった祝味菊老師の基本処方を頻用し効果を見ている⁽²⁾。竜骨、牡蛎、磁石、炒酸棗仁、茯神、炮附子の組み合わせが基本である。烏頭の使用は炮附子量の使用量を軽減するためであって、烏頭 1g = 炮附子 5g 換算と考えており、ここでは炮附子 18g になる。ここでは一号三金湯に加えて葶藶や石葦といった清熱利湿薬を用いている。

4-4 3-23 日の昼に激痛発作が起こり、夜まで持続。24 日以後数回針灸治療も行い、状態は軽快している。肉眼的血尿はないが、両少腹痛は軽く持続。

脈診	寸脈	関脈	尺脈
左	滑細	沈細（滑）	沈細
右	細滑	細滑 按微	沈細滑

舌診：やや暗、舌苔白。舌裏の静脈の怒張有り

処方：竜骨 20g、牡蛎 20g、磁石 20g、炒酸棗仁 24g、茯神 15g、炮附子 3g、烏頭 3g、金錢草 30g、海金沙 15g、鷄内金 6g、烏朮 9g、乾生姜 9g、七洗い呉茱萸 15g、大棗 9g、炒甘草 4.5g 3x14T

【処方解説】清熱薬を減らし、より温裏作用を強化するために、烏朮や呉茱萸を用いた。呉茱萸は苦みやえぐみが強く、一般には 6g 以下の使用量であるが、これも『傷寒論』の記述に従い「七回の湯通し」をすることで、著効が得られる 15g の薬量服用を可能にして

ある⁽³⁾。

4-18 腹痛無く、投薬終了。

結石症としては泌尿器系結石以外にも胆石が有るが、いずれも「三金湯」で治療する。処方内容が異なり、仮に泌尿器系に対応するものを「一号三金湯」、胆石に対処する処方を「二号三金湯」としよう。現在用いている薬量は以下の通り。

一号三金湯：金錢草 30g、海金沙 9g、鶏内金 6g

二号三金湯：金錢草 30g、川玉金 9g、鶏内金 6g

もちろん辨証に基づく基本処方にこれらの生薬を加味することになる。

「金錢草」はタデ属ミズヒキ（金錢草）*Poligonum filiforme* (Thunb.)の全草で、味辛苦、性涼、小毒（妊婦忌服）である。清熱利湿、涼血止血、散瘀止痛の働きを持つ。

「川玉金」（中薬名：郁金）は、帰源植物姜黄 *Curcuma longa* L.（または温郁金 *C. wenyujin* など）の根塊である生薬名「鬱金」（中薬名：姜黄）から出るヒゲ根の先の小塊をいう。味は辛苦、性寒であり、心肝胆経に帰す。疏肝利胆、活血止痛、行気解鬱作用を持つ。

「海金沙」はシダ植物フサシダ科カニクサ属カニクサ（海金沙）*Lygodium japonicum* の孢子である。味甘く淡、性寒、膀胱、小腸、脾経に帰す。利水通淋、清熱解毒作用を持つ。

「鶏内金」はいわゆるスナギモ（家鶏の砂嚢内膜）であるが、味甘く、性平、脾胃腎膀胱経に帰す。健脾消食、消癥化石、渋精止遺の働きを持つ。

【文献及び注】

- 1, 訳は蜂谷邦夫「白居易と老荘思想」（『白居易の文学と人生 I』pp.156-180、勉誠社、平成五年）を一部改訂。
- 2, 小高修司：難治の眩暈への新しい対処法——中医火神派への接近——、中医臨床 29(2) 202-206,2008
- 3, 小高修司：呉茱萸の運用——奔豚を中心に——、中医臨床 29(3) 377-381,2008